

中嶋隆著『西鶴と元禄文芸』

石原千秋

能力もないのについて原稿を引き受けてしまう軽率はいつになっても治らない。この書評を引き受けたのも、その軽率の一つにはちがいない。専門的なことが分からないのはもちろんのこと、それ以外でも見当違いのことを書くに決まっている。だから、いまは中嶋氏に失礼がないようにと願うばかりだが、この本から大いに刺激を受けたことは事実である。そのことを書いておきたい。ただし当方の能力が限られているから、言及できる論考はごく限られてしまう。せっかくの機会なのにと、そのことを申し訳なく思う。

本書は、中嶋氏がこの七年ほどの間に書いた様々な論考を中心に編まれていて、やや雑然とした印象を与えるが、その分『西鶴と元禄メディア』（NHKブックス、一九九四）や『初期浮世草子の展開』（若草書房、一九九六）からはうかがえない「もう一人の中嶋隆」が見られて、そこに興味を引かれた。それは「理論家としての中嶋隆」であり、「教育者としての中嶋隆」である。

「理論家としての中嶋隆」の面がいかになく発揮されているのが『好色一代男』の「はなし」——「リアリズム」のテキスト

分析——である。中嶋氏によると、西鶴の小説は「はなしらしき小説」（傍点原文）とか「はなしの気分で書かれた小説」（同）といった言葉で性格付けられていると言う。その「西鶴の「リアリズム」の仕組みを「文体化された「はなしの構造」と捉え、ヤーコブソンのコミュニケーション理論を応用して理論的に説明しよう」と試みたのが、この論考である。

中嶋氏はまずロトマンの言う、物語は「はじめとおわり」によって区切られることによって成立するという基本的な地点から出発する。そして、『好色一代男』では「はじめ」から「おわり」にかけて「コード転換」が行われていることを確認し、それが「文化モデルとの関連が濃厚な伝統的小説の枠組」と「延宝頃より流行していた「軽口咄」とに対応するとしている。後者は『好色一代男』冒頭部の「しる人はしるぞかし」といったフレイズが「訴え機能」と「場の機能」（ヤーコブソン）とをあわせ持っていることに典型的に表れており、それは「聞き手」を強く意識した語り口だと言うのである。

近代文学研究者としては、この「聞き手」が「読者」と同一であるか否かという点に非常なる興味をかき立てられるのだが、中嶋氏は、西鶴の小説においては「はなし手あるいは聞き手の設定が、叙述の視点に転化されない」と結論する。つまり、「聞き手」と「作者」とは「場」を共有するだけであって、「読者」は作品内に内在化された文化的コードを「作者」と共有することによって「鑑賞」という名のコミュニケーションを交わすことになるわけだ。この位相において、主人公「世之介」はリアリティー

を持つと言うのである。「はなし」の機能は「虚構を示すコードになっているにすぎ」ず、「世之介」のリアリティーを保証するのは、「作者」と「読者」が共有する文化的コードの方だということになる。そして、先に指摘したへはじめとおわりがこの文化的コードを形成する。テキスト内部に文化的コードを形成する機能が組み込まれていると言うのだ。

こうした手続きによって、「西鶴の文体は、「はなしの場」を強調した文体」だということが、ようやく理論的にも確認されたと言つてよさそうだ。門外漢の私から見ても、この論考の意義はいくつも考えられる。

一つは、近世文学で言う「はなし」というタームの定義やニュアンスを理解できていない初心者にも西鶴の小説の特質をきちんと説明できることである。その意味では、理論的な説明の試みはもっぱら研究者向けということではなく、むしろ学部学生のような初心者に向けてこそ求められるのではないだろうか。この点には中嶋氏の教育者としての一面が隠されているように感じた。

二つは、研究において文化的コードを導入するポイントがテキスト内に確定できたことである。昨今のカルチュラル・スタディーズは文学をその外側からのみ考察する傾向がある。しかし、中嶋氏のこの論考を参照することによって、解釈においても文化的コードを導入できるのである。このことの意義は大きい。中嶋氏の提示したモデルを採用すれば、文学テキストの解釈を更新する作業と文学テキストを相対化する作業とを同時に行うことが可能になるからである。それは、カルチュラル・スタディーズ

に新しい局面を導入することだと言える。

三つは、近代小説で「はなし」と言えば、「コンスタティヴ」(事実確認的)という言葉と対比的な関係にある「パフォーマティヴ」(行為遂行的)という言葉を用いてかたづけられてしまいが、これはあまりに一面的な説明にすぎないことが見えてくることである。中嶋氏の論考を参照すれば、「パフォーマティヴ」な文体にも文化的コードを共有する「作者」と「読者」が存在することになるからである。つまり、近代文学で「語り」という一つのタームで説明している局面を二つの位相に分節化できるということだ。どうやら近代文学研究では、「パフォーマティヴ」とか「自己言及性」といったタームがあまりに多くの要因に目隠しをしてしまったようだ。

そして最後に、どんなに「コンスタティヴ」に見えるテキストでも必ず「パフォーマティヴ」な側面を持っているとすれば、テキストの内部に「場」を形成する位相を想定できることである。それは「声」の問題領域である。近代小説のリアリズムが写真を規範として構築されたことを考えると、仮に近代小説が「はなし手あるいは聞き手の設定が、叙述の視点に転化されない」側面を持つなら、日本の写実主義形成期において「声」と「写真」との葛藤があったことが想定できるということである。言うまでもなく、「視点」を設定しない写真はありえない。しかし、「声」は「視点に転化されない」。だとすれば、「写真」は「声」と葛藤する宿命を持つ。中嶋氏の提示したモデルは日本の写実主義形成期に働いた力学を浮き彫りにするために重要なヒントを与えてくれ

ることになるのだ。

巻頭に収められた「西鶴『会話文体』の遠近法」は、こうした「はなし」の内在する文体」を、西鶴が獲得した「聞き手がたえず意識された文体」、すなわち「状況」を再現し集約する会話文体」として説明している。次の「西鶴・読者・想像力——コンテキストの複綜をめぐる——」は、西鶴テキストにおける文化的コードのあり方を論じたものと読むことが出来る。

と言うわけで、理論に傾きすぎた印象を与えかねないからだろうが、先の「好色一代男」の「はなし」は五番目に配置されているが、この論考を基点として編み直しながら読むと、本書の見通しは格段によくなると思う。

「教育者としての中嶋隆」の面目がいかになく発揮されているのは「西鶴の遊女観——多義的「主題」と「作者」について——」である。実を言うと、この論考で示された「西鶴は、主体性という観点から見れば、遊女を道具や商品としてではなく、人間としてとらえている」という結論が教室に持ち込まれた場合のことを考えると、粗忽者の学生が「そうか、江戸時代の遊女はそんなに非人間的な扱いを受けていたわけではなかったんだ！」と誤解しそうな気がして、ほんの少しだけ危惧を抱くのだが、「西鶴の人間主義」(傍点石原)という勘所を外さないためにも、中嶋氏の授業の組み立ては有効に機能するように思う。

この論考のはじめで、中嶋氏は今度の指導要領の改定で「主題」という言葉が排除されたことに触れて、教師と学生とのコ

ド差がますます拡大するだろうことに危機感を抱き、それに代わるものとして新しい古典教育の必要性を説いている。私は、「主題」という言葉を「作者の中心的な主張」などと定義する限り、教室では「主題」は教師の闇魔帳の中にしか存在できないのだから、「主題」という言葉を「解釈の要約」と再定義することによって教室の民主主義を実現すべきだと考えて、何度かそう書いてきたのだが、中嶋氏の実践はもっとラジカルで現実的である。

中嶋氏も「主題」という言葉を「読者側のコードに位置づけ直す」ことを提案している。その上で、「読者の読み取った無数の「主題」を教室においていかに「立体化」するのか、その具体的な方法を提案している。それは、それぞれ複数のキーワードを挙げながら、①「支配的(読解による)主題」、②「対抗的(読解による)主題」、③「転換的(読解による)主題」という三段階の「主題」把握を学生に経験させるというものである。①が「通説化した「主題」」であって、②がそれを反転させた「主題」で、③が①や②とは「異なる座標軸を設定するような「主題」(つまり、パラダイム変換)であってみれば、これはまさに研究史の展開そのものであると言っている。

実は、私も教室では学生に、私が「物語文」と名付けている、テーマを一文で表した文章を(出来たら主語を入れ替えて)必ず三つ書かせることからテキストを読み始めることにしているのだが、中嶋氏の実践はそれよりもっとシステマティックで、かつ「立体」的だ。何しろ研究史の転換までを、一気に体験させようと言うのだから。私も、今度は非真似てみようと思っている。

もしこういう授業法を理論的にすぎると言つて批判する人がいるとしたら、その人は研究者であることを止めて随筆家にもなるべきだろう。もちろん、随筆によつてしかできない文学のわかり方があることは否定しない。しかし、大学は文学を知的に理解するためのトレーニングを行う場である。その意味で、中嶋氏の教育実践は現在の大学教育にもつとも必要とされているものだろう。後半に収められた四編の古典教育の実践はいずれも学生参加型のスタイルを採つていて、中嶋氏の切実な思いが伝わってくるが、それもこうしたカッチリした理論的な後付があつてはじめて可能になつたのだと思う。

後に「西鶴と元禄メディア」に発展することになる講演「西鶴と出版ジャーナリズム」と「西鶴とメディア」は、芳川泰久「關小説家バルザック」（せりか書房）や宮下志朗「読書の首都パリ」（みすず書房）といった名著を思い出しながら興味深く読んだ。近代文学の場合、関東大震災による資料の消失で歴史が切断されてしまつていたのでなかなか困難な研究テーマだと聞いているが、限られた資料から立論する姿勢には見習うところが少ないだろう。

さて、やはりずいぶん我が儘な書評になつてしまつたが、こういう機会を与えられたことに感謝したい。

（二〇〇三年四月 若草書房 A5判 三〇八頁 一〇〇〇円）

新刊紹介

谷脇理史著

『好色一代女』の面白さ・

可笑しさ

本書は、そのタイトルが示すように、井原西鶴の『好色一代女』を「面白く」「可笑し」く楽しんで読む為の道標である。

明治期の自然主義的解釈以来、『好色一代女』は厳しい近世封建社会における悲惨

な女の生と性を描いたものとして、長く読まれてきた。これに対し著者は、江戸時代の視線に立ち帰り、「慰み草」「笑ひ草」としての『好色一代女』観を提示する。

作品冒頭の「美女は命を断つ斧」から始まり、読者は『好色一代女』六巻二十四章を最後まで順々に読み通すことになる。大胆に引用された原文も、著者の風刺の効いた譬えや解説によつて、難無く面白可笑しく読めてしまうのが、本書の一番の魅力であらう。

当時の町人読者の受けとめ方を、「お公家さんもとマやしスキやからなあ」といった調子で巧みに説明し、また一代女が就いた「女祐筆」という職業を「お嬢さま学校の女教師」と、現代の風俗をも折り込むように訳出するこの指南書は、今まで当たり前を生真面目に読んできた他の古典作品をも、改めて読み直してみようという気にさせてくれる一冊である。

（二〇〇三年一〇月 清文堂出版 A5判 二八九頁 二八〇〇円） [長沼 幸]